

四〇年ぶりの故郷で 民宿とカフェを開業

「しまの灯」オーナー／Ｕターン 田中 稔子

子育てを終え、島へＵターン就職

私の故郷は、高知県の最西端に浮かぶ小さな島・鵜来島です。中学校卒業後、四〇年近く島を離れていましたが、四人の子どもたちの独立をきっかけに、七年前の平成二三年にＵターンしてきました。

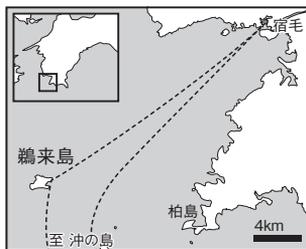
しかし、島に帰るにはいくつかのハードルがありました。特に、島には産業と呼べるものがなく、収入を得ることが困難で、将来性や希望を見出すことが難しく、人口三〇人余の限界集落は、いつか無人島になる可能性もありました。ではなぜ戻ってきたのか……。

それは、島の持つ居心地の良さです。五四年という歳月を生きてきて、自分らしく生きられる場所だと思えたのはこの故郷の島でした。NPO法人宿毛雇用サポートセンタ

ー職員という島での仕事が見つかったことも大きかったです。同センターでは、宿毛市役所鵜来島連絡所の窓口業務に四年間携わりました。

責任の重い島の救急患者対応

これまで島へ帰郷することはあっても、暮らすのは四〇年ぶりです。当時は島に学校も診療所も商店もありました。Ｕターン後の生活では、さまざまな不便さを感じましたが、一番の問題は島に商店がないことでした。住民は、個人で本土の商店に注文して品物を送ってもらっていました。そこで、スーパーの宅配サービスを利用し、島の方々からの注文をまとめて、週二回、生鮮食品やその他の商品を届けてもらうようにしました。こうすることで送料の個人負担を軽減し、個別に注文する手間をなくしました。



鵜来島：宿毛市の南西約23kmにある島。面積1.31km²、人口38人(平成30年7月末現在)。標高250mの竜頭山が最高点で、周囲を断崖が取り囲む。古くは「浮島」「天蓋島」「卯来島」と呼ばれていた。沿岸一本釣り漁業と渡船業を主産業とし、磯釣りのメッカとしても知られる。

連絡所の仕事でもっとも負担が大きかったのは、救急患者が出たときの対応です。島には医師や看護師は常駐しておらず、月一回の巡回診療と、月二回の保健師の健康相談のみです。住民のほとんどが高齢者の島ですから、いつ体調が悪くなり、急患が出るかわかりません。医療の知識のない私にとって、救急患者を運ぶチャーター船を要請するか否かの判断が困難でした。頭が痛い、気分が悪いなどの症状から本当に救急を必要とするのかどうかを見極める。命にかかわる判断をすることの責任の重さが心身の負担となり、結果的にセンターを退職することになりました。

島人の安心感につながる宿を

これからの島での生活をどうしたものか。私は、長年飲食業に勤めた経験があり、料理をつくるのが好きだったこともあって、「いつか自分でカフェを開きたい」と考えていました。そこで、島でカフェを開業する物件を探しましたが、所有者の問題などで折り合いがつかず、その時は断念しました。

そんな時、家中渡船が営んでいる民宿が休業となっていたので、この渡船の釣り客を対象とした民宿の経営を思いつきました。早速相談する

と、家中渡船も島に泊まりたいという客を断っていた経緯もあり、お互いの思いが一致して宿の開業の承諾をいただきました。

もともと民宿をしていた家だったため、建物の修理は必要ありませんでした。ただ、内装については、室内の壁とトイレの改修、温水器の修理、各部屋へのエアコン設置などを行ったため一〇〇万円以上の費用がかかりました。これら開業資金はすべて自己資金で賄い、平成二十七年一月に民宿「しまの灯」がオープンしました。

夜になると島は真っ暗になります。この民宿は集落の頂上付近にあり、電気を



民宿「しまの灯」の前にて。



集落の全景。民宿「しまの灯」は集落の高台にある。

点けるとまるで灯台の灯りのように目立ちます。これが宿名の由来です。島に灯りがともることは、そこに人が住んでいるという安心感につながります。この名前にはいろいろな意味が込められています。

せっかく島に泊まっていたのだから、四季折々の「島ごはん」を提供したい。島ごはんとは、島で採れた海の幸、山の幸を使った料理のことです。春先には、ツワブキ、ハマボウフウ、シロネなどの山菜を使った煮物、和えもの、てんぷら料理。夏の食欲のない季節には、あっさりとした食べられる、かつて島の多くの家で栽培されていた落花生を使ったさつま汁（冷汁）。一二月〜二月の寒い時期に磯で獲れるメノリ（岩ノリ）と三角の形をしたクボ貝を佃煮にして白いごはんに混ぜた、メノリ飯（磯の香りとクボ貝の食感が最高です）など、島の食材を活かすことを心掛けています。

特にお客さんに人気なのが、イサギ（イサキ）の煮つけと、南蛮漬けです。お客さんの喜ぶ顔を見ると、私の大好きな鵜来島を好きになってくれた人がまた増えたなど、嬉しくなります。

カフェの開業に向けパソコン操作を勉強

現在、島には五軒の民宿がありますが、いずれも釣り客中心のため一ヶ月〜六月の営業で、七月〜一〇月の間はほとんど休業状態です。私が島での生活を維持するために考

えたのは、観光や仕事で来島した方が昼食をしたり、ゆっくり休憩したりできる場所づくりで、誰もが集えるカフェの開業でした。これらを提供する場所がないことは、島へ帰ってきてからずっと気になっていたことでした。

島にはたくさん空き家がありますが、人に貸すとすれば話は別です。実際に、何軒かには断られました。また、今回もカフェをつくる夢の実現は難しいのかなと、思い始めていた頃、取り壊す家があるという話を聞きました。さっそく家主に島やカフェに対する想いを伝え、先方のご厚意もあり、借りることができました。これがカフェ「しまの灯」の土台です。

次のハードルは資金です。民宿の開業のため、すでに自己資金を投入していましたので、カフェの改修に対する余裕はあまりありません。そこでクラウドファンディングに挑戦することにしました。



多くの島の方々に賑わったカフェのお披露目会。



カフェで提供している日替わりランチの一例。

このチャレンジのきっかけは、東京大学の学生との出会いです。その方は、高知県内の集落活動センターの調査をされており、私にカフェ開業へ向けたアドバイスをしてくださいました。開業資金調達のためのクラウドファンディングの活用、島でカフェをするための現状分析(強み・弱み・運営形態)などです。当時、私はボタン(キー)をひとつ押し間違えただけでパニックになるくらいパソコンが使えず、インターネットが怖いという先人観を持っていました。しかし、六〇歳からの手習いで、地域おこし協力隊の白濱武晴さんにパソコンの基本操作から文章の手直しまで、いろいろ教えていただきながら、クラウドファンディングに臨みました。

改修に必要な資金は一〇〇万円でしたが、二月(平成三〇年三月二八日)五月(平成三〇年三月二八日)で達成するのは難しいだろうと考え、五〇万円を目標金額にしました。民宿に來られた宿泊客や島のイベントで交流した方々などがこの挑戦を知り、協力してくれました。

多くの人たちからの応援と支援により、期間内に五七万円を集めることができました。

この資金を元手に、今年七月、カフェ「しまの灯」はオープンしました。店名は民宿と同じです。ほかの名前も検討しましたが、やはりカフェも島にとっての「灯り」(=癒し、安心感)となってもらいたいと考えたからです。

カフェの食事は、日替わり定食のみ。いま食べてもらいたい料理を提供しようという想いがあるからです。また、島の人口や来島者数を考えると、都会のようにたくさんのメニューを提供することはできません。背伸びをせず、できることをできる範囲でするようにしています。

住民が気軽に集える店を目指して

カフェの大きな役割の一つとして考えているのが、島の方々のコミュニケーションの場所として気軽に集まれる店づくりです。坂や階段ばかりの急峻な島にあって、カフェは港近くの比較的低い場所にあるため、お年寄りでも足を運びやすいと思います。

また、島では介護保険料を払っていても、デイサービスやヘルパーさんの支援など介護保険サービスを十分に受けることができません。独り暮らしの高齢者は、お互いの助け合いがなければ島で生活することができない厳しい現実があります。そこで、独り暮らしで偏りがちな食事のサポートとして、お弁当の配達や、月に二回ほどみんなまで店に

行政からのメッセージ

◎《鶴来島愛》を持ってチャレンジを続ける人

宿毛市には高知県で唯一の有人離島があり、鶴来島はその一つとなります。本土より海上はるか23.3km、周囲わずか6.7kmの小さな島で道路はなく、車も1台も走っていない、まるで時間が止まったような感覚が味わえる心癒される場所です。

島の人口が年々減少するなか、本市では鶴来島連絡所の窓口業務を平成23年4月よりNPO法人宿毛雇用サポートセンターへ委託しました。その時に採用されたのが、稔子さんです。

島のことが好きだ。島のために自分にできることはできる限りしたい。民宿やカフェを営む理由も、島人の集う場所をつくりたい。島に来たお客さんにゆっくり過ごしてもらいたいと、稔子さんが口にするのはすべて「鶴来島のために」という言葉です。60歳を超えてクラウドファンディングという新しいことに挑戦できたのも、《鶴来島愛》があったからこそだと感じています。

この10年で、島にはUターン、Iターンなど新しい風も吹きはじめました。鶴来島では地域おこし協力隊員や集落支援員が配置されています。また、住民が主体となって、島外の人材などを活用しながら、生活・福祉・産業・防災などの活動について、それぞれの地域の課題やニーズに応じた取り組みを地域ぐるみで総合的に行っていく「集落活動センター鶴来島」が発足しました。同センターでは、昨年商店の運営を開始しています。鶴来島に商店が復活したのは、じつに16年ぶりです。

行政としては、このような活動が今後も持続できるよう支援をしていくことが重要だと考えています。

(宿毛市企画課離島振興係 桑原美穂)

田中稔子 (たなか としこ)

鶴来島生まれ。中学校を卒業後、進学のため島を離れる。大学卒業後、結婚・出産を経験し4児の母に。子どもの独立後、2011年にUターン。NPO法人宿毛雇用サポートセンター勤務を経て、民宿「しまの灯」を開業。2018年7月、クラウドファンディングなどを活用しカフェ「しまの灯」をオープン。

集まる食事会などの企画も考えています。今回のカフェの開業で感じたことは、できないと諦めるのではなく、挑戦することです。それによって想いは伝わることを体験しました。協力してくださった人たちはもちろん、これから出会う人たちも大切にしながら、店のコンセプトである「人と人とのつながり」や「地域に密着した

カフェ」を、鶴来島という特別な空間の中につくっていくたいと思います。島に帰ってからの七年間で、たくさん島の宝物を見つけてきました。年々失われていくものもありますが、ここにしかないものや人との出会いを大切にしながら、私の愛する鶴来島の将来を考えていきます。